

チンドン屋のリズムにのせて

中村 伊知哉

チンドン屋チンドン。たーのーしーみやこー。数名の大人と大勢の子どもが「東京ラプソディ」を歌いながら歩いている。大人は派手な衣装に身を包み、クラリネットにカネ太鼓。子どもたちは自分で作った打楽器をシャカシャカやっている。チンドン屋さんごっこだ。今年1月に東京・お台場で開かれた「ワークシヨップ」。



にそれをしまったことだけを妙におぼえている。引っ込み思案だった自分がなぜ見知らぬ不思議なおじさんお婆さんに一人ついて行ったのだろう。笛や太鼓が楽しかったのだろうか。いや、どちらかといえば、チンドンの音楽はマイナー系が多く、きらびやかな出で立ちもどこかもの哀しい。

明治・大正時代、関西では「広目屋」、関東では「東西屋」と呼ばれていたものが、昭和初期にカネ太鼓のスタイルを確立して「チンドン屋」と呼ばれるようになったという。時代劇スタイルと西洋楽器という、江戸と近代の間に咲いた妖しい風俗。ニッポンが富国強兵へと立ち向かった背伸びのポーズ。

きつく叱られたのは、東京オリンピックのころだ。高度成長が江戸を明治を遠くにおいやろうとしていた。チンドンのリズムは明るい時代の植音ではなく、楽しいちょんまげが消えていくことへの挽歌だったのだ。

数年前、モロッコのフェズという町を歩いた。9世紀に建設されたイスラムの都だ。ミントの香りが漂う狭い路地で、目の前を、ロバが率いる楽隊が賑やかに通り抜けた。見事な打楽器の隊列だった。近代を蹴散らそうとするかのような明るい意志を持つリズム。千年ずっと奏でてきた民族の鼓動なのだろう。思わずついて行ってしまった。気がつけば路地の外だ。

知らない人について行ってはいけません。昔から親はそう教えてきたはずだ。13世紀のドイツでは、130人の子どもがハーメルンの笛吹

コレクシヨン2005」でのこと。賑やかな行列のあとを私も思わずついて行く。

もう40年も前だ。チンドン屋さんについて行ったことがある。最初は近所の友だちが数人いたはずだが、ぼつりぼつり抜けて、気がつけば一人。ここどこ？ 知らない町だ。ちょんまげのおじさんと、白い顔のお婆さんが、急に恐ろしく見えた。もう暗い。

それから、どうやって帰ったのだろう。おぼえていない。玄関先で親にきつく叱られて、そのあとクールミントガムを一枚もらったのと、クマさんのアプリケがついたズボンのポケット

き男について行ってしまった。音を奏でて練り歩く。それは磁力だ。洋の東西、時代を問わず、異界に誘おうとする。

でもまあいいではないか。チンドンチンドン。ねり歩いてみよう。ついて行くんじゃないかと、みんなを連れて行こう。大声を出してみよう。多少はみ出してみよう。大人も子どもも楽し都。江戸はおるか、昭和も遠くなった。自分のリズムで、自分の楽器で、自分の声で、宣伝してみよう。

日本人は引っ込み思案で主張ベタと言われる。国際社会では生き抜けないぞ、と。そんなことはあるまい。和製アニメやゲームは世界のトップ・ブランドで、今や日本はカッコいいとの評判ではないか。平成の女の子たちはギャル文字を発明して、新しいケータイ・コミュニケーションを切り開いている。日本女性が世界文明をリードするなんて、仮名文字で文学に金字塔を打ち建てた平安女性以来、千年ぶりではないか。「ワークシヨップ・コレクシヨン2005」というのは、子どもが創作して表現する活動を集めたイベントで、CANVASというNPOが主催した(<http://www.canvas.ws>)。チンドンのほか、アニメやロボットを作って、インターネットで世界に発信する。

次々に、新しい技術が登場する。新しい機械が生まれる。新しいビルが立ち並ぶ。新しい服装が流行する。でもきつと、体を流れるリズムや音色は、そう簡単には変わるまい。チンドンチンドン。賑やかな行列に参加して、そう思った。



中村 伊知哉 (なかむら いちや)

スタンフォード日本センター研究所長、国際IT財団専務理事、CANVAS副理事長、(株)音楽制作者連盟顧問、(株)CSK顧問を兼務。京都大学在学中は「少年ナイフ」ディレクター。1984年から98年まで、郵政省にて情報通信行政や行政改革に従事。その後2002年までMITメディアラボ客員教授。著書に『インターネット、自由を我等に』(アスキー出版局)、『デジタルのおもちゃ箱』(NTT出版)など。<http://www.ichiya.org>